

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡

——偽文書のアリバイと時代のシルエット——

北川 健

「天下ハ一人ノ天下ニ非ズ……」「見渡せば穢多も乞食もなかりけり……」、こうも高杉晋作まがいの殺し文句にあつては、その向きの研究者からしてイカされる。さほどの「殺し」のレトリックこそ、偽文書の要件ではあるうか。しかし、如何な偽文書であろうと、一定の歴史的な情報と制約の上に仕組まれている以上、歴史研究のコト至ればそのデッチアゲの底は割れるというもの。虚構の歴史のヒトリ歩きは、断たねばならない。

ここでは、高杉晋作の書簡とされてきている文書三通について、記事内容の面から、これを偽作！だとする。

一 死者からの急報

書簡Aの内容は、次のとおり。

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

書簡 A

朶雲拝読、出兵ニ関シ、
色々御異論ノ由、御案シ申候。
国家命脈、目前差迫リ
候ニ、区々タル論ハ断然止メ、
皇室御回復ノ論ニ願度。
狂生心、戦相待居リ候ニ付、
別段、騒不申。天下ハ一人ノ
天下ニ非ズ。微力ト雖モ
傍觀出来不申、君命
有之次第、一狂言致度候。
（伊藤）
（井上）
花山・春山両兄潜
伏処、急速御通知
被下度。陸山翁より同志
者へ書付、急ヲ要候ニ付、
迅速御尽力御願申上候。
先ハ右御聞候。直書外、拝

鳳上右万縷々

極月念六

赤間隠人

東行敬白

木圭先生

極密独折

その写しメモが偶然飛び込んだのは、昭和四〇年代の後半。ときあたかも幕末の「天下」論を追っていた私にとって、願ってもない史料であった。私は小躍りした。

さて、見てのとおり欠年の文書。史料として起用するにはまず年代比定を要する。一、二度、試みかけてみたものの、ヨソ見にふけてやらずじまい。このほど着手しなおして、意外！な展開となった。

すなわち、年代推定は、登場する面々のツゴウから見、いちおう慶応元年（一八六五）すると、ひっかかっているのは「陸山翁」前田孫右衛門である。ほかならぬ死者！の登場ということになる。かれ前田はちょうど一年前の一二月、高杉の挙兵のあおりを食って、刑死している。とすれば、この「陸山翁より同志者へ書付」とは、前田生前のものか――。

加えて高杉は、それを馬関「潜伏」^③の井上ばかりか、長崎出張中の伊藤にまで急報を要するとしている。それも、いまや薩長同盟締結のため「上阪」前日か当日にある木戸に向かつて、これへの「尽力」^⑤を求めているのである。一藩の存亡をかけて重大任務の出発まぎわにある当事者への依頼とは、どうも思えない。

それに「直書外、拝鳳上右万縷々」という末辞に至っては、しばらく遠隔別離し合う事態にそぐわない。それやこれ、A書簡には割り切れぬものがある。

二 他者からの「コピ」

年次にもまして私の関心事は、「天下ハ一人ノ天下ニ非ズ……」というくだり。魅力ある言句。ところが調べていくと、これは高杉御大のオリジナルではない。何んとこれとほぼ同文の、全く別人の書簡があるのである。すなわち次の書簡Dがそれである。

書簡D

（前略）我れは必戦相待ち候事に候得ば、

別段相騒ぐ事も無之、天下は一人の天下に無之候、

微力といへども傍観も相成り間敷候、

勅命朝に下り夕に變ずるは皇国之習、

乍併長州候に於ては是れ姑息之思召無之故、

先年以來御国力被為尽、今日之場に立到候事は天下所知、

於此極勅命相行れ候事有之候ては……………

…（後略）

十月五日

竜再拝

木戸先生執事

「竜」とは、あの坂本竜馬ではない。但馬出身（生野拳兵）の志士八木竜三^⑦である。それも、ほかならぬ木戸あての書簡にあつての文言である。

あるいは、高杉はその八木書簡を木戸から見せてもらい、それを得意として今度はみずから木戸あての書簡に転用したのだろうか。それこそ高杉と木戸との間ならでは、合言葉にも似たエールなのだろうか。

それにしても、「必戦相待」を、よもや「心、戦相待」と読み替える高杉ではなからう。「必戦」こそ高杉の愛用句、常套句である。それとも「必戦」を「心、戦」としているは、メモ者の読み違いか。

これまた不可解。ともあれ、このパロディならぬコピライター？高杉のほどに、私はマユにツバすることとなつた。

三 死者あての書簡

マユにツバしてみると、一挙にコトが見えてきた。というのは、そのウラに、ほかならぬ書簡Bのことが私の念頭にあつたからである。

書簡B

拝復、

御申越の儀、巨細承知

いたし、先日御内談ノ

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

寄兵隊設立ノ事二関し

狂生心中

見渡せば穢多も

非人もなかりけり

吉田ノ里の秋の夕暮

御笑読可憚候、天下

形勢も面白敷相成申候

御寸暇もあらば些少

御来状是祈

如月念四

晋作

山内老台

侍夫

この書簡Bについては、かねてから耳にするところがあり、その疑問点を田村哲夫氏とさきごろ点検^⑧することがあったばかり。

すなわち、書簡Bの問題は、まず日付「如月念四」にある。奇兵隊の創設をうたうのに、「如月」＝二月とはオカシイ。奇兵隊の設立は、どなたサマも知つてのとおり六月初旬^⑩のはず。

それとも、奇兵隊は二月の創設なのだろうか。ところがその二月、当の主人公高杉は江戸に居てござる。奇兵隊創設は、何んと江戸から高杉がリモートコントロールしてのことだったとでも云うのだろうか。

そしてB書簡の決定的、致命的なシツポ？は、宛名に「山内老台」を置いているところにある。「老台」とは、あのティーンエイジの奇兵隊総督山内梅三郎の父親通遠（元通）のことである。だが、同家筋に照会すると通遠はツトに嘉永六年（一八五三）の八月中旬、一〇年前に没している。

すると高杉は、死者と「内談」し、冥土と文通しつつ奇兵隊を創出していたことになる。

四 主人公の不在

B書簡だけではない。こうなってくると、C書簡までも連座させなくてはなるまい。「見渡せば穢多も乞食なかりけり……」、この高杉晋作のそれとされる書簡Cは、かつて

年表 高杉晋作の動静（文久3年）

1月5日	江戸で松陰の遺骸を改葬。
2月	（江戸滞在）
3月1日	江戸を立出。帰国の途につく。
3月	（京都滞在）
4月11日	帰萩。屋敷牢。
5月12日	井上・伊藤ら英国留学に出航。
6月6日	馬関で奇兵隊を組織。

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

維新一〇〇年記念全国展を飾り、衆目を魅いた。また部落解放史の研究のなかでも、関心と論議を呼んできた。

書簡C

分袂後、鴻城へ
罷出候処、諸彦
方より寄兵隊
設立ノ事ニ付、色々
御高配被下、何分
高位高禄ノ士よりハ
見込有ル農商人
合議の方遣ニ
見込有之、狂生心中ハ
見渡せば穢多も
乞食なかりけり
吉田里の秋の夕暮
御一笑是祈、何れ
不日帰関の上、井上

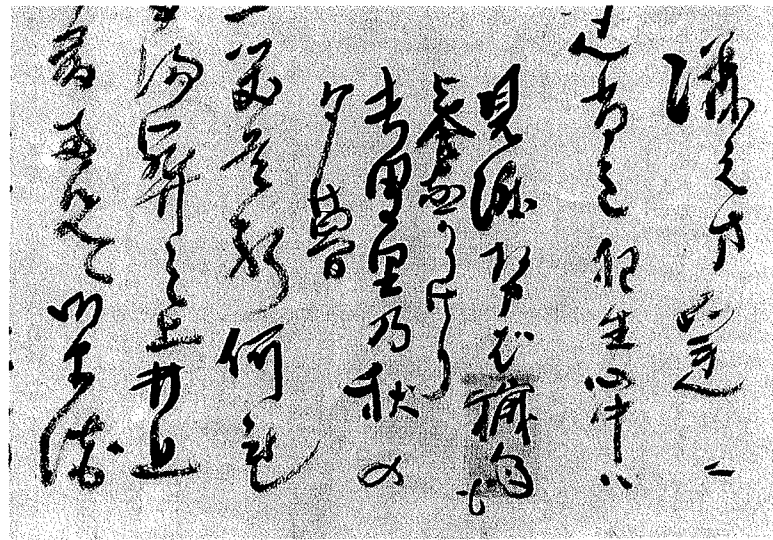


写真1 書簡Cの狂歌部分

・伊藤両兄へ御早談
可申候、只今来客
中、酔毫御
免、書外拝鳳
の上、万々縷々

念三

高杉東行

前田陸山翁
侍正

つい先ごろまで私自身、書簡Bはたとえ偽書であろうと、この書簡Cまではさにあらず！、とばかり思い込んでいたところが、これに焦点と照明を当ててみると、これまた大いに奇劇！なのである。

というのは、書簡の日付は「念三日」＝三日。だが、高杉の動静（一〇頁年表）はと見ると、それに該当する旬月はないのである。当の高杉こそは、文久三年（一八六三）正月には、江戸にあって英国公使館焼討ちの興奮も醒めや

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

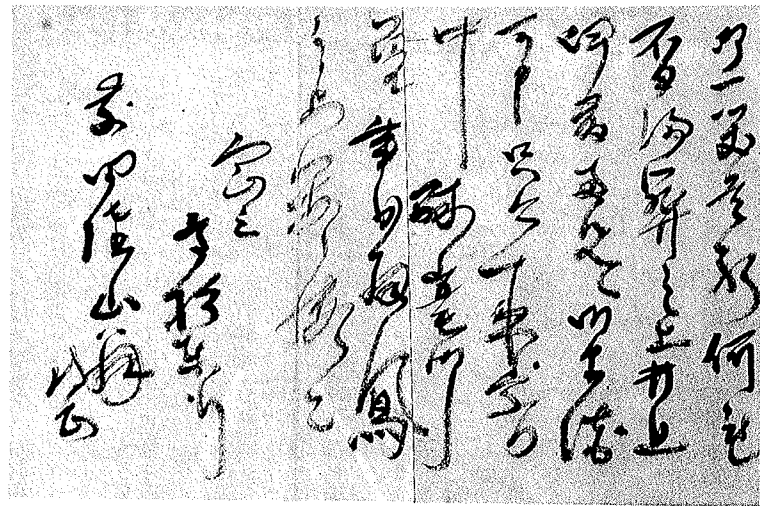


写真2 書簡Cの末尾部分

らぬまま、松陰の遺骨を改葬。二月も江戸。三月、江戸を
 発つて下旬は京都。四月、帰藩と同時に萩での入牢。藩議
 に召喚されるのが六月初旬。そのころ五月下旬には井上・
 伊藤はロンドンに向かう洋上。そして六月下旬だと、奇兵
 隊はすでに海峡紛争（田ノ浦進攻）のさなか。

年表 高杉晋作の動静（文久3年）

つまり、一月から六月まで、「鴻城（山口）へ罷出候処、
 諸彦方より寄兵隊設立ノ事ニ付……」というような「念三
 日」なぞは、とてもありはしないのである。
 かくて書簡Cは、歴史のタイムテーブルにはどうしても
 置きようのない宙に浮くシロモノ。

五 時代のカゲ

「見渡せば穢多も非人もなかりけり吉田の里の秋の夕暮」
 「天下形勢も面白敷相成」……、奇兵隊創設に際してそう
 ウンぶく高杉晋作像（『書簡B・C』）は、もはや虚構、フ
 イクションなのである。歴史不在の創作品！としての高杉
 書簡——。

1月5日	江戸で松陰の遺骸を改葬。
2月	（江戸滞在）
3月1日	江戸を出立。帰国の途につく。
3月	（京都滞在）
4月11日	帰萩。屋敷牢。
5月12日	井上・伊藤ら英国留学に出国。
6月6日	馬関で奇兵隊を組織。

そう云えば、そもそも「吉田の里の秋の夕暮れ」など、奇兵隊第一幕の舞台面からを「吉田の里」としているこ
 とからして、バチガイである。吉田に奇兵隊が陣所を置くのは、当初からではなく、翌々年の慶応元年（一八六五）
 である。明らかに後世！の作なのである。

それでは、「天下ハ一人ノ天下ニ非ズ……」と獅子吼する冒頭の書簡Aはどうなのか。もともと、その審別、歴史
 の在・不在の証明！アリバイは、コト容易ではない。ひとスジ縄ではないかない。

書簡A（高杉晋作書簡）

（前略）狂生心、戦相待居居リ候ニ付、

別段、騒不申。天下ハ一人ノ

天下ニ非ズ。微力ト雖モ

傍観出来不申、君命

有之次第、一狂言致度候。

書簡D（八木竜三書簡）

（前略）我れは必戦相待ち候事に候得ば、

別段相騒ぐ事も無之、天下は一人の天下に無之候、

微力といへども傍観も相成り間敷候、

勅命朝に下り夕に変ずるは皇国之習、（後略）

しかし、仮りに、この高杉文言が後世のネット造であるなら、そのシタジキとされている八木書簡は改ザン者たち

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

一四

さらに広く見て、江戸・東京での福沢諭吉の著述^⑮と
とおすなら、「……ニ関シ」「……ニ関シテ」という用語
が一般化してくるのは、明治も二〇年代。（二三頁表2）
そして、その果ては、いみじくも同じ『防長回天史』
（大正3年刊）が如実に見せてくれている。

防長回天史

（明治四年三月）六日、常備壯兵徴募ニ関シ布告ス
ルコト左ノ如シ

慶応1（一八五六）

常備壯兵隊御取建ニ付而者、去冬厚御令之旨モ
有之、今般兵制御一新ニ付……

（明治二年十一月）其事ニ関シ（中略）左ノ如ク書
イテアル

〃 2（一八六六）

此度、諸隊拳テ朝廷ノ常備兵ト被仰付候ニ付、
余ニモ亦……

明治2（一八六九）

かくて、私に云わせるなら、この『防長回天史』流の文
体と口調「……ニ関シ」の表現・用語こそ、偽作者を
らえ染めていた時代の風儀、シルエットであつた、とても

〃 4（一八七二）
〃 5（一八七二）

云おうか。
そう云えば、B書簡にも「寄^(寄)兵隊ノ事ニ関シテ……」、と「関シテ」がある。むべなるかなA書簡、B書簡とも同
じ穴のムジナである。
思うに偽作者は、みずからの背負う時代のトバリ影を抜いて飛翔するだけの、時空を越えた「歴史」のツバサは
持ち合わせなかつた！のである。

おわりに——その歴史像の構図

ニセモノも、それはそれでまた歴史資料である。それなりの時代の歴史観、人物観を投影、具象していることで、
大きな意味をもつ。

それに、これら書簡が偽文書であつても、その歴史像の構図までがニセモノであるとはかぎらない。
書簡の場合、基本的には『防長回天史』『東行先生遺文』の刊行に拠つての、その歴史認識である。
すなわち、八木竜三が口走るように「必戦」の行動の論理が「天下は一人の天下に無之」であつてみれば、「必戦」
の先導者高杉もまたその体現者にほかならない。

（前略）熟れ幕府と御手切れに相成り候義に付き、
御家老上阪被仰付候も、不被仰付候も同然、

一日も速に戦争相始り候義、為天下為御国家御回復之良機会、
彼之温言甘辞は我之大害、不動如山、（後略）

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

一五

表1 『白石正一郎日記』での「……に付き」の用例

- 笠船高崎来談藍玉の事ニ付、明石屋の積とり分……
- 製練所産物一条ニ付、早々出筑候様ニ申来る
- 廉作と喧嘩一条ニ付、段々扱人有之
- 此度夷船打払ニ付而は昼夜心配遂苦勞……
- 錦小路様一件ニ付、御殿より御礼の品……
- 当家の借財の事ニ付、三四五百にて……
- 新宅隠居山入の事ニ付、金三両辻出し遣ス
- 家賃値上之事ニ付、不平異論申来ル
- 地下一条ニ付、新ち会所遠田へ行及談示
- 長崎村島の事ニ付、正一郎……見分す

（慶応元年九月二三日・高杉晋作書簡^⑮）

また、奇兵隊での「穢非」除外策を指して高杉自身「暫く」の措置だと公言してもいるように、高杉の基本意図。「心中」は確かに「穢非」登用の路線に立っている。

（前略）今日之国勢に当り、肉食之士人等皆事に堪へず、故に藩主に乞ひ、新兵を編せんと欲せば、務めて門閥の習弊を矯め、暫く機兆（穢多）之者を除之外、

士庶を不問、俸を厚くして、専強健之者を募り、（後略）

（元治元年正月六日・高杉晋作書簡^⑯）

「天下ハ一人ノ天下ニ非ズ」「穢多も非人もなかりけり」、高杉をしてそう放言せしめている書簡の歴史像こそは仮構だとしても、その構図としては歴史のスチュエーション^⑰にかなっている。

註①狂歌「見渡せば……」の書簡に触れた論文としては、次のものがある。

- 小林茂『長州藩明治維新史研究』（昭和四三）一六六頁
- 布引敏雄『長州藩部落解放史研究』（昭和五五）二六九頁
- 前田朋章『幕末における長州藩部落民諸隊の活躍』（部落解放研究）四〇号・昭和五四
- 北川健『幕末長州藩の奇兵隊と部落民軍隊』（山口県文

書館研究紀要」一四号・昭和六二）
②メモの提示者（書簡所有者？）は在住（？）の市町村名を告げただけで、氏名は名乗らなかつた。

このメモ該当の書簡を堀哲三郎『高杉晋作全集』上巻四五六頁（昭和四九）が載せている。文言、体裁ともメモと同一である。原稿によれば「全集」編集の最終段階でその（書簡Aの）登載がなされた形跡がある。（堀先生文庫「高

杉晋作全集・書簡五」原稿）

- ③井上は二月二四日付の木戸宛の書簡で「当分老兄之御着関迄ハ潜伏、誰ニモ相对仕ラヌ覚悟決シ居申候」と告げている。（中原邦正『井上伯伝』五卷三八丁）
- ④末松謙澄『孝子伊藤公』一四三頁（明治四四）。「十二月一日に（中略）長崎行を命ぜられ長崎で新年を迎へ」とある。
- ⑤中原邦平『井上伯伝』五卷・四〇丁（明治四〇）によれば、木戸の上阪は「十二月の末、日未詳、蓋し二十五六日頃ならん」とある。

妻木忠太『松菊木戸公伝』上巻六―七頁（昭和二二）だと、

「十二月二十六日、公、山口を發し翌二十七日（中略）三田尻を發す」とある。

⑥『防長回天史』五編上・四六〇頁

⑦本名北垣国道。但馬の豪農出身。農兵を組織し生野拳兵に参加。坂本竜馬の傘下に入り西郷隆盛依頼の兵糧米の買付けを長州藩で周旋。木戸に上京を促す。（宮地佐一郎『坂本竜馬全集』五八四頁（昭和五三））

⑧「必戦」の語は、「必戦なれば国家盛典」（慶応二年四月井上宛）、「必戦御覚悟」（同月山県・福田宛）などとある。

高杉晋作の「天下」「穢多」の書簡（北川）

（堀哲三郎『高杉晋作全集』上五〇一・五〇三頁・昭和四九）

⑨前掲拙稿（註①）執筆の際。書簡Cについては当時未着手。

⑩『山口県文化史年表』（昭和三二）では六月七日（時山弥八、もりのしげり）大正五。

清水唯雄『高杉晋作年譜』（古川薫『高杉晋作のすべて』昭和五三）では六月六日。

⑪山口県教育委員会『維新一〇〇年記念全国展・近代国家への歩み』（昭和四二）四五頁

⑫前掲註①参照

⑬前掲拙稿。註①参照

⑭『白石家文書』（昭和四三）

⑮岩波書店『福沢諭吉全集』（昭和三三―三九）

⑯堀哲三郎『高杉晋作全集』上二七二頁・昭和四九

⑰拙稿。前掲註①参照

⑱『東行先生遺文』一五四頁（大正五）

⑲「あくまで書簡のスチュエーションに立って読むべきである」「ここは、奇兵」取立（庶民）取立をめぐる路線論争の環として読み取ることが大事であろう」として「高杉の真意」「心中」なるものを前稿（拙稿註①）で

ソントクしたが、もはや本稿のとおり書簡C・Bなるものからして、ましてそのスチュエーションも、成立するもので

はない。前稿での「書簡のスチュエーション」をここで撤回する。

〔付記〕

「天下ハ一人ノ天下ニ非ズ」、飛び込んできたこの高杉晋作？の高言をオニの首にして、山県太華——吉田松陰——高杉晋作と、幕末の「天下」論の展開を追跡しよう、という魂胆からトツかかった研究。ところがそれが初鼻から大当てハズレ。もくろみクズレとなったものの、はからずも別の新しい成果、闇のクビ？を挙げることはなった。ケガの功名？とでも云うのだろうか。

なお、当研究に際しては、長府博物館の伊秩洋子氏、長府図書館の中原郁生氏の見識の高いご理解に遇されることがあった。記して深謝の気持を銘しておきたい。

また、当稿の内容は第66回山口県地方史研究大会（長府大会・昭和62年10月25日）で「高杉晋作の書簡三通——その歴史的アリバイ」と題して公開口頭発表したものである。